



## ハロルド G. ヘンダーソンの足跡

小村, 志保美

---

**(Citation)**

国際文化学, 31:168-177

**(Issue Date)**

2018-03-20

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/81010143>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010143>



## ハロルド G. ヘンダーソンの足跡

### Harold G. Henderson: Life and Achievements

小村 志保美

KOMURA Shihomi

#### 概要

ハロルド・G・ヘンダーソンは、俳句を英訳した著書 *An Introduction to Haiku*(1958)<sup>1)</sup> によって欧米での俳句の受容に貢献したが、ヘンダーソンの生涯や業績を系統立ててまとめた研究は見当たらず、彼の俳句観や英訳俳句の研究を進めるにあたり、その生涯及び業績を俯瞰する必要があると考えた。そのため、本稿では先行研究に加え、新聞や資料の分析をもとにヘンダーソンの生涯と業績をまとめた。ヘンダーソンは、日本美術や俳句に関する翻訳、アメリカでの日本文化の教授、日本語辞書編纂の企画や日本語文法書の出版などの研究活動を行い、同時に、モニュメンツ・メンとしての美術品保護、ジャパン・ソサエティへの貢献、GHQ時代の業績などの社会活動も行っている。さらに、退官後は英語によるハイク<sup>2)</sup> (HAIKU) の紹介と普及に尽力した姿があった。それぞれの時代におけるヘンダーソンの活動は多彩で、一見分野が異なり断片的なようだが、いずれの業績も「日本文化」に通じており、日本とアメリカの橋渡しの役割を果たしたと考えられる。

#### キーワード

Harold G. Henderson、英訳俳句、HAIKU、日本研究、日本語教育

#### I はじめに

太平洋戦争後の欧米における日本ブームの際、数多くの俳句が英訳俳句として受容され、なかでもレジナルド・H・ブライス(1898-1964)の *Haiku*<sup>3)</sup>と、ハロルド・G・ヘンダーソン(1889-1974)の *An Introduction to Haiku*が広く読まれた。両者は海外における俳句の受容史を論じる際、必ずと言っていいほど言及されるが、ブライスについてはその生涯を含め、詳細な先行研究が数多くあるのに対し、ヘンダーソンについては、俳句とのつながりのほか、戦後、GHQで勤務したことや昭和天皇の「人間宣言」の草案に関わったことなどは各分野で個々別々に研究され、その業績を系統立てて有機的にまとめた研究は見当たらない。

今後、ヘンダーソンの俳句観や英訳俳句の研究を進めるにあたり、彼の生涯及び業績を包括的に俯瞰する必要があると考え、本稿では先行研究や新聞などの諸資料の再確認、さらに、国際交流基金 JFIC ライブラリーでの調査で得られた資料の分析をもとに、ヘンダーソンの生涯とその業績をまとめることにしたい。

## II ヘンダーソンの経歴と業績

### 2.1 太平洋戦争前——初来日、辞書編纂プロジェクト、ニューヨークの日本文化会館——

1889年ニューヨーク市で生まれたヘンダーソンは、弁護士で美術(浮世絵)蒐集家だった父親の影響で日本・中国の美術に関心を持つようになった<sup>4)</sup>。1910年にコロンビア大学を卒業、さらに同大学で化学・工学の修士号を取得、その後、私的研究助手や鋼管会社勤務をしている<sup>5)</sup>。1914~18年の第1次世界大戦下、アメリカ陸軍で軍務につくが、その後、1927年にはニューヨークのメトロポリタン美術館、極東部門のアシスタント学芸員の職に就き、韓国、中国、日本の美術に関する5本の論文を執筆している<sup>6)</sup>。

1930年、ヘンダーソンは初めて日本を訪れるが、その際、亡き父親の日本への想いを生かすために日本美術の研究を志す。3年間日本語を学びながら日本美術研究を進めるが<sup>7)</sup>、俳句にも興味を覚え<sup>8)</sup>、1933年に俳句を英訳して紹介した *The Bamboo Broom*<sup>9)</sup> を出版する。*The New York Times* (1934年4月22日付)には「イマジストに影響を与えた日本の俳人たち」と題して書評記事が掲載されている。翌35年には、当時の日本美術史界の先駆者だった源豊宗(1895-2001)の『日本美術史図録』を英訳した、*An Illustrated History of Japanese Art*<sup>10)</sup> を出版する。ヘンダーソンの英訳は簡潔にして要を得ており、日本美術の紹介に役立つと期待されている<sup>11)</sup>。

1935年に、アメリカへ帰国後、角田柳作(1877-1964)率いるコロンビア大学の日本研究の教授陣に加わり、日本語に堪能な欧米人の日本研究者の一人として「日本語」4科目(2科目は日本美術)を担当する<sup>12)</sup>。そして1937年、ヘンダーソンは日米双方の協力を前提とした「日本語辞書編纂プロジェクト」を携え再来日し、当時の日本における国際的な文化交流の拠点であった国際文化振興会(K.B.S.)を訪れた<sup>13)</sup>。このプロジェクトはルイス・V・レドウ(1880-1948)の尽力により、ロックフェラー財団から25万ドルの経済的支援が確約されていたようである<sup>14)</sup>。ロックフェラー財団の年間報告書(1937年)にはこのプロジェクトについての記載がないため確かな金額ではないが、同時期にコロンビア大学の日本研究へ3年間で7,500ドルの支援を行ったことが記載されており、当時、財団が日本を含めた極東研究に理解を示していたことは確かであろう(後述)<sup>15)</sup>。

ヘンダーソンが提案した辞書は、日米双方の専門家50名ほどが協力して編纂する、*Oxford English Dictionary* のような大規模で包括的なものであり、古語から現代語までの語源と初出、意味の変遷などを歴史的に追いつつ、時代ごとの用例を豊富に記載するという、共時的にも通時的にも言葉を分析する辞書であった<sup>16)</sup>。国際文化振興会(KBS)アーカイブ資料には、1937年12月10日、国際文化振興会第53回理事会における、ヘンダーソンの提案の申し出についての議事要録がある。

#### 四、外国人用日本語字典編纂に対する米国側の協力に付コロンビア大学のハロルド・ヘンダソン氏より申出の件

外国人用の日本語字典の権威あるもの皆無にして外国学者不便を感じつゝありし処最近来朝のヘンダソン教授英和、和英の大辞典編纂の急務を力説し本邦に於ける編纂事

業の如何によつては米国側に於て道義的及財政的援助の可能なることを提言せられたり。依つて本件研究の爲め委員会を組織し百科事典の編纂と併行して右種字典の編纂に着手することに原則的に決定。

五、米国ニウヨークのレドウ氏編纂版画本印刷出版に付協力方ヘンダソン氏を通じ依頼出の件(緊急提案)

目下滞京中のヘンダソン氏に対しレドウ氏より来電あり、右によればロックフェラー財団の寄附金によりレドウ氏所有の版画二百五十点を本邦に於て複製し四冊又は五冊とし、本会と米国内の一団体との共同名義の下に出版したきに付本会にて適当部数買上希望方申越したり。本計画は日本文化協力の具体的実現の一なるとロックフェラーとの関係とにより五十冊の程度に於て買上することにより協力するに決定<sup>17)</sup>。

この時点では K.B.S.も辞書の必要性を認識し、ヘンダーソンの提案の受け入れを一旦決定しているが、半年後に K.B.S.はこの提案を断り、辞書編纂は K.B.S.独自で行うこととしたため、ヘンダーソンが提案した辞書編纂プロジェクトは実現しなかった<sup>18)</sup>。一方、緊急提案として同じく議題に上がっていたレドウ所有の版画の出版については、ヘンダーソンとレドウの共著で、写楽の浮世絵と共に歌舞伎を解説した *The Surviving Works of Sharaku*(1939)<sup>19)</sup> の出版に関係があるのかもしれない。

K.B.S.は、辞書編纂プロジェクト頓挫後もヘンダーソンやロックフェラー財団との関係を維持している。1938年度事業報告によれば、1939年にヘンダーソンへ日本の国宝写真が寄贈されている<sup>20)</sup>。また、K.B.S.は1938年8月、対米関係の円滑化を図るため、ニューヨークのロックフェラー・センターの一角にあるインターナショナル・ビルディングに日本文化会館を設置した<sup>21)</sup>が、初代館長だった前田多門(1884-1962)は、当時、日本文化には興味を持たないマスコミやアメリカ人が多いなか、ヘンダーソンがよく会館を訪れていたことを著書の中で回想している<sup>22)</sup>。これもまたヘンダーソンと K.B.S.との関係が続いていたことを示していよう。

また、前述したように、ロックフェラー財団から支援を受けたコロンビア大学には1938-1939年度から、「中国・日本学部」が設置され、ヘンダーソンは角田柳作、ヒュー・ボートン(1903-1995)と共に「上級日本語」3科目を担当している<sup>23)</sup>。

## 2.2 太平洋戦争中——日本語教育、対日心理作戦、モニュメンツ・メン—

真珠湾攻撃直後の1941年12月9日、角田柳作が拘引された。ヘンダーソンは同僚らと角田の釈放に尽力し、3カ月半後の3月24日に自らが身元引受人となって角田の条件付きの仮釈放を得た<sup>24)</sup>。翌1942年、ヘンダーソンはコロンビア大学とロックフェラー財団の協力を得て、日本語の文法書 *Handbook of Japanese Grammar*<sup>25)</sup>を出版する。序章には「やむを得ない事情により、1年早く出版することになった」とあるが、同年、ヘンダーソンがミネソタ州の陸軍情報学校の教科主任になっている<sup>26)</sup>ことから、コロンビア大学を一時離れねばならなかったためか、あるいは、陸軍情報学校で教科書として使用するために出版を急いだのではないかと推測される。戦時中、ヘンダーソンは政府向けの日本語教育プログラムを取り仕切り<sup>27)</sup>、戦争末期にはダグラス・マッカーサー(1880-1964)の下でニュー

ギニア、フィリピンなどでの対日心理作戦に加わり、日本人兵士に投降を促す「落下傘ニュース」の制作に関わった<sup>28)</sup>。アメリカ軍はこの作戦に、社会心理学者や文化人類学者などを動員しているが<sup>29)</sup>、ヘンダーソンは日本語や日本文化に精通している人物として動員されたのであろう。

また、大戦中、連合軍には特殊部隊の一つとしてモニュメンツ・メンという組織が作られた。14ヶ国から集まった美術や芸術の専門家で構成され、価値ある遺跡や文化遺産を戦禍から保護し、略奪された芸術品を奪還するための組織である。戦時下での文化遺産保護というモニュメンツ・メンの任務は歴史的にも前例のないものであったが、ヘンダーソンはこの組織の極東部門のメンバーに名を連ね、日本・中国の歴史的価値のある芸術品や建築物の保護に関わった<sup>30)</sup>。

### 2.3 太平洋戦争終戦後——CI&E 課長、日本語ローマ字化問題、「人間宣言」草案——

1945年、太平洋戦争後、ヘンダーソンはマッカーサーの下に来日した。日本の美術や文化に造詣が深いことや対日心理作戦のスタッフをしていたことなどから<sup>31)</sup>、発足したばかりの民間情報教育(CI&E)課長に就任し、宗教・教育改革を進めた。*The New York Times* (1945年9月18日付)には民間出身のヘンダーソンが日本の教育を民主化するために日本に向かうことが記載されている。

ヘンダーソンの着任後、10月19日に日本の教育改革の立案と実施に関して、アメリカの助言と援助が必要であるとして、教育の専門家を集めた「米国教育使節団」を組織する計画が緊急課題として持ち上がる。幸い、日本側の文部大臣前田多門とアメリカ側の使節団委員長ヒュー・ボートン(1903-1995)は、ともにヘンダーソンの知人であり、戦後の日本の教育を民主化する改革を円滑に進めることが可能だったようである<sup>32)</sup>。

CI&E教育課長としてのヘンダーソンは、日本語ローマ字化問題と関わっている。この問題は日本国内でも明治以降、国語国字問題の一つとして議論され続けており、GHQ占領期には漢字制限を含めた新国語を望む『朝日新聞』と漢字廃止を勧める『読売報知』の主要新聞社2社の間で論争が始まっていた<sup>33)</sup>。CI&E教育課でも音韻・音声面での利点を主張する日本語ローマ字化推進論者のロバート・K・ホール(1913-?)と、ローマ字化反対のヘンダーソンとの間で対立があったが、ホールが口頭で出した「教科書ローマ字使用・ローマ字化指令」をヘンダーソンが撤回したとされている<sup>34)</sup>。この後、ヘンダーソンは12月にはCI&E顧問となった。

さらに、ヘンダーソンはこの時期、本稿冒頭で触れたブライスと初めて出会い<sup>35)</sup>、彼の会話に端を発して、昭和天皇のいわゆる「人間宣言」の草案作成にも関わっている。このことについては多くの先行研究があるが、ブライスが依頼し、ヘンダーソンが主要部分の草稿を書いたとされている<sup>36)</sup>。

占領下の日本で精力的に活動したヘンダーソンだが、GHQに関わる日本での滞在期間は短く、1年足らずで翌年にはアメリカに帰国している。

### 2.4 アメリカ帰国後——科目としての詩歌、ジャパン・ソサエティ、ハイクへの貢献——

戦後、アメリカが海外における日本研究の中心になり、1950年に入るところにはコロンビ

ア大学の日本研究は全米でもトップクラスになっていた<sup>37)</sup>。サー・ジョージ・サンソム(1883-1965)を所長とする東アジア研究所が設立されると、ヘンダーソンは日本の美術・言語に加え、詩歌を教えるようになる<sup>38)</sup>。美術に加え詩歌を担当するようになったのは、日本美術史図録の英訳や、俳句を紹介した著書 *The Bamboo Broom* におけるヘンダーソンの業績が評価されてのことだろう。

また、ヘンダーソンは戦前から関わっていたジャパン・ソサエティ(JS)での活動も続けている。JSは「日本人とアメリカ人のお互いの生活の正しい認識と理解の中で、お互いの経験や業績から学ぶ」ことを目指した非営利団体で<sup>39)</sup>、1907年に、ニューヨークで設立された。この時期は戦前からの会員数減少と財政状態の悪化に加え、戦時中のさらなる退会者の増加によって厳しい運営状況にあった。ヘンダーソンは戦時中から副会長の職にあったが、1948年、レドウ会長の死去に伴い、暫定的に会長職に就く。その後正式に選任され、1952年まで会長の地位にあった。ヘンダーソンは戦後の困難な状況下にあったJSを支え、ロックフェラー3世に会長職を引き継いだ<sup>40)</sup>。

1956年、ヘンダーソンはコロンビア大学を退官し、2年後の1958年に俳句の入門書 *An Introduction to Haiku* を出版する。25年前の1933年に出版した *The Bamboo Broom* を基にしたものだが、再翻訳した句や新しく英訳した句があることや、字体やレイアウトなど英訳俳句の表記法が変更されていることから、ヘンダーソンの俳句観の変遷も辿ることができる。ドナルド・キーン(1922-)は、*The New York Times*(1959年3月8日付)の書評欄で、原句をイメージできるヘンダーソンの英訳俳句と脚韻を高く評価している。この本は、冒頭でも少し触れたが、一般読者に広く読まれ、当時のアメリカの俳句ブームに影響を与え、今日でも版を重ねている。

1960年には、ヘンダーソンは昭和天皇より勲二等瑞宝章を授与された。瑞宝章はブライスマッカーサーなど多くの外国人にも与えられているが、勲二等は破格の扱いである。俳句をはじめ日本文化を海外に紹介したことや、日米関係の改善に貢献したことが授与の理由であった<sup>41)</sup>。

1960年代に入ると、アメリカでは新しい価値観を東洋文化に求める動きが始まり、禅や俳句が広く受容されていく。そして、アメリカ人の興味は英訳俳句を鑑賞することから英語でハイクを作ることへと広がっていった。1964年の日本航空のアメリカ就航記念の俳句コンテストに約41,000句の応募があったことなどもその一例だが、さらに小学校で国語の教材にハイクが広く用いられるようになっていく<sup>42)</sup>。このような社会背景を受け、1965年に、ヘンダーソンはJSの依頼により、俳句とハイクの特徴、ハイクの作り方、ハイクの指導法までを論じた *Haiku in English*<sup>43)</sup> を出版した。

さらに、1968年には、ハイク・ソサエティ・オブ・アメリカ(HSA)の設立メンバーの一人となった。ニューヨークで結成された21人の会議で始まるこの団体は、現在では800人以上の世界的な組織へと成長し、ハイクコンテスト、ハイク雑誌 *Frog Pond* の発行などハイクの発展に重要な役割を果たしている。

ヘンダーソンは1974年、85歳で他界する。亡くなる直前までハイクの定義と季語や季節の扱いに苦心していたようだが<sup>44)</sup>、その後、HSAで決定されたハイクの定義にはヘンダーソンの考えが反映されている<sup>45)</sup>。また、1976年には、ヘンダーソン夫人により、未発表

の優秀な創作英語ハイクに与えられる賞として、HSAの創立者の一人であるヘンダーソンを記念する「ヘンダーソン賞」が創設された<sup>46)</sup>。

### III まとめと考察

ハロルド・G・ヘンダーソンの生涯と業績を時系列に沿って追うことにより、戦前から戦後の激動の時代にあつて日本と深く関わりながら、ヘンダーソンが多彩な活動を行っていたことが明らかになった。日本文化研究に限っても、日本美術や俳句に関する研究、翻訳による海外への日本文化紹介、アメリカの大学での日本文化の教授と指導、日本語辞書編纂の企画立案や日本語の文法書の出版、そして、60年代以降のハイクの紹介と普及促進など多岐に及ぶが、さらにモニュメンツ・メンとしての美術品保護、ジャパン・ソサエティの存続への長期に及ぶ助力、GHQ時代の日本語ローマ字化推進論者ホールが出した口頭指令の撤回、「人間宣言」の草案作成など、さまざまな局面で活動している。

それぞれの業績は、一見すると分野が異なり断片的に見えるが、根底は「日本文化」でつながっており、いずれにおいても日本とアメリカの橋渡しの役割を果たした。

最後に付言すれば、ヘンダーソンには前田多門や角田柳作、レドウやブライスなど、日米双方に幅広い人脈があった。ヘンダーソン夫人は、”remarkably modest and gentle man”と追想し<sup>47)</sup>、ヘンダーソンと直接関係した人たちは、ヘンダーソンが温厚で物腰が低い人物だったことを記している<sup>48)</sup>。そうした性格が人脈を作り、多彩で精力的な活動を産み出す一助となっていたのかもしれない。

なお、参照資料としてヘンダーソンの経歴と業績をまとめた表1を添付する。

### IV おわりに

日本とアメリカを軸に多彩に活動したヘンダーソンはどのような俳句観をもっていたのか、日本美術、俳句、日本語などに関する知識は彼の俳句の英訳方法にどのように影響を与えたのか、さらに、俳句の入門書である *An Introduction to Haiku* が、戦後のブームだけに終わらず現在でも読まれ続けているのはなぜか。これらの点についてさらに研究を進めることを今後の課題としたい。

(コミュニカ学院非常勤講師)

### 注

<sup>1)</sup> Henderson, H. G. *An Introduction to Haiku: An Anthology of Poems and Poets from Basho to Shiki*, Garden City, New York: Doubleday Anchor Books, 1958.

<sup>2)</sup> 本稿では英語で作られた俳句 ‘Haiku in English’ を「ハイク」と定義する。

<sup>3)</sup> Blyth, R. H. *Haiku 4 Vols*, Tokyo: Hokuseido, 1949-52.

<sup>4)</sup> 木下道雄『側近日誌』文藝春秋(1990)、p.321。八木亀太郎『寒来暑往』温山会(1989)、p.22。

<sup>5)</sup> 竹前栄治『GHQ』岩波書店(1983)、p.118。

<sup>6)</sup> *Korean Ceramics*(1927), *Early Chinese Frescoes*(1927), *Japanese Prints on View* (1928), *Japanese prints Recently Acquired* (1929), *Japanese Prints by Harunobu on*

- Coxinga* (1929), Online Computer Library Center(OCLC), *WorldCat*<<http://www.worldcat.org/>>.
- 7) ジョン・ダワー、三浦陽一訳『敗北を抱きしめて下巻』岩波書店(2004)、p.51。木下、前掲書(1990)、p.321。八木、前掲書(1989)、p.22。
- 8) 平川祐弘『平和の海と戦いの海』講談社(1993)、p.252。
- 9) Henderson, H. G. *The Bamboo Broom: An Introduction to Japanese Haiku*, Tokyo: J. L. Thompson, London: Kegan Paul, 1933.
- 10) Minamoto, Toyomune; translated from the Japanese by Henderson, H. G. *An Illustrated History of Japanese Art*, Tokyo: J. L. Thompson, London: Kegan Paul, 1935.
- 11) 渡邊一「書評『日本美術史図録』英語版、源豊宗著、ヘンダーソン訳」『美術研究』、帝国美術院付属美術研究所、N51号、38、1936-3。The New York Times Archives, 1936年10月4日付記事。
- 12) 荻野富士夫『太平洋の架橋者角田柳作－「日本学」のSENSEI－』芙蓉書房出版(2011)、p.112。
- 13) 八木亀太郎「Dr. Harold G. Henderson as a Japanologist and Haiku Exponent」『松山商大論集』松山商科大学商経研究会、17(7)、67-112、1967-2、p.73。
- 14) 八木、前掲書(1989)、pp.22-26。
- 15) The Rockefeller Foundation, *Annual Report*, 1937, pp.329-331。
- 16) 八木、前掲書(1967)、pp.69-72。
- 17) 国際交流基金 JFIC ライブラリー特別コレクション『国際文化振興会(KBS)アーカイブ』国際文化振興会議事要録、第53回理事会(昭和12(1937)年12月12日)。
- 18) 八木、前掲書(1989)、pp.27-28。
- 19) Henderson, H. G. and Ledoux L. V. *The Surviving Works of Sharaku*, New York: E. Weyhe in behalf of the Society for Japanese Studies, 1939.
- 20) 国際交流基金 JFIC ライブラリー、前掲資料、1938年度事業報告。
- 21) 国際文化振興会『KBS30年のあゆみ』(1964)、p.20。
- 22) 前田多門『アメリカ人の日本把握』育生社(1940)、p.34-35。木下、前掲書(1990)、p.321。
- 23) 荻野、前掲書(2011)、pp.112-113。
- 24) 同上、pp.166-167。
- 25) Henderson, H. G. *Handbook of Japanese Grammar*, Houghton Mifflin, 1943.
- 26) 木下、前掲書(1990)、p.322。
- 27) ダワー、前掲書(2004)、p.51。
- 28) 同上、p.51。木下、前掲書(1990)、p.322。吉田守男『京都に原爆を投下せよ』角川書店(1995)、p.214。
- 29) 『米軍マニラ司令部発行「落下傘ニュース」復刻版』新風書房(2000)、pp.6-8。
- 30) The Monuments Men Foundation <<http://www.monumentsmenfoundation.org/the-heroes/the-monuments-men>>.
- 31) 竹前、前掲書(1983)、p.118。
- 32) 木下、前掲書(1990)、pp.322-324。
- 33) 安田敏朗『国語審議会』(講談社現代新書1916)講談社(2007)、pp.34-39。
- 34) 茅島篤『国字ローマ字化の研究』風間書房(2000)、pp.176-177。
- 35) ダワー、前掲書(2004)、p.51。平川、前掲書(1993)、pp.252-253。
- 36) *Shrine Shinto After World War II*, *Henderson Memo* (1968)、『側近日誌』(1990)、『敗北を抱きしめて』(2004)、などに詳しい。
- 37) 荻野、前掲書(2011)、p.180。
- 38) ヒュー・ボートン、五味俊樹訳『戦後日本の設計者ボートン回想録』朝日新聞社(1998)、p.297。
- 39) Henderson, H. G. *Haiku in English*, Rutland, Vermont: Tokyo, Japan: Charles E. Tuttle Company, 1965, p.6.
- 40) Japan Society, *Brief History*<[http://www.japansociety.org/page/about/brief\\_history](http://www.japansociety.org/page/about/brief_history)>.
- 41) 佐藤和夫『俳句から HAIKU へ』南雲堂(1987)、p.28。八木亀太郎「米国俳句界近況－

覚え書と論評一』『松山商大論集』松山商科大学商経研究会, 26(4), 241-304, 1975-10、pp.254-255。

42) Henderson, op.cit.,(1965),p.31. 佐藤、前掲書(1987)、pp.98-100。

43) Henderson, op.cit.,(1965)。

44) 八木、前掲書(1975)、pp.268-272。

45) HSA の定義: ”HAIKU(1) An unrhymed Japanese poem recording the essence of a moment keenly perceived, in which Nature is linked to human nature. It usually consists of seventeen join (Japanese symbol-sounds).(2) A foreign adaptation of (1). It is usually written in three lines of five, seven, and five syllables. (See also HAIKAI, HOKKU).”、八木、前掲書(1975)、pp.273-274。ヘンダーソンの考え: ”Part of our description of haiku is “a poem recording the essence of a moment keenly perceived, in which Nature and human nature are linked.”” 同上、p.269。

46) Haiku Society of America<<http://www.hsa-haiku.org/>>。

47) 八木、前掲書(1975)、p.253。

48) 前田多門『山荘静思』羽田書店(1947)、pp.216-217。八木、前掲書(1989)、p.20。八木はヘンダーソンが1937年にK.B.S.を訪れた際に出会い、親交を持つようになった。

## 参考文献

荻野富士夫『太平洋の架橋者角田柳作ー「日本学」のSENSEIー』芙蓉書房出版(2011)

茅島篤『国字ローマ字化の研究』風間書房(2000)

木下道雄『側近日誌』文藝春秋(1990)

国際文化振興会『KBS30年のあゆみ』国際文化振興会(1964)

ジョン・ダワー、三浦陽一訳『敗北を抱きしめて下巻』岩波書店(2004)

佐藤和夫『俳句からHAIKUへ』南雲堂(1987)

竹前栄治『GHQ』(岩波新書) 岩波書店(1983)

ヒュー・ボートン、五味俊樹訳『戦後日本の設計者ボートン回想録』朝日新聞社(1998)

平川祐弘『平和の海と戦いの海』講談社(1993)

前田多門『アメリカ人の日本把握』育生社(1940)

前田多門『山荘静思』羽田書店(1947)

源豊宗『日本美術史図録』星野書店(1932)

八木亀太郎「Dr. Harold G. Henderson as a Japanologist and Haiku Exponent」『松山商大論集』松山商科大学商経研究会, 17(7), 67-112, 1967-2

八木亀太郎「米国俳句界近況ー覚え書と論評一」『松山商大論集』松山商科大学商経研究会, 26(4), 241-304, 1975-10

八木亀太郎『寒来暑往』温山会(1989)

安田敏朗『国語審議会』(講談社現代新書 1916)講談社(2007)

吉田守男『京都に原爆を投下せよ』角川書店(1995)

渡邊一「書評『日本美術史図録』英語版、源豊宗著、ヘンダーソン訳」『美術研究』帝国美術院附属美術研究所, N51号, 38, 1936-3

『米軍マニラ司令部発行「落下傘ニュース」復刻版』新風書房(2000)

Blyth, R. H. *Haiku 4 Vols*, Tokyo: Hokuseido, 1949-52

Henderson, H. G. *The Bamboo Broom: An Introduction to Japanese Haiku*, Tokyo: J. L. Thompson, London: Kegan Paul, 1933

- Henderson, H. G. and Ledoux L. V. *The Surviving Works of Sharaku*, New York : E. Weyhe in behalf of the Society for Japanese Studies, 1939
- Henderson, H. G. *Handbook of Japanese Grammar*, Houghton Mifflin, 1943
- Henderson, H. G. *An Introduction to Haiku: An Anthology of Poems and Poets from Basho to Shiki*, Garden City, New York: Doubleday Anchor Books,1958
- Henderson, H. G. *Haiku in English*, Rutland, Vermont: Tokyo, Japan: Charles E. Tuttle Company, 1965
- Minamoto, Toyomune; translated from the Japanese by Henderson, H. G. *An Illustrated History of Japanese Art*, Tokyo: J. L. Thompson, London: Kegan Paul, 1935
- Wilhelmus H.M. Creemers. *Shrine Shinto after World War II*, Leiden: E.J.Brill,1968
- 国際交流基金 JFIC ライブラリー特別コレクション『国際文化振興会 (KBS) アーカイブ』  
KBS 報告書類デジタル版「国際文化振興会(KBS)報告書・資料」  
国立国会図書館, *Daily Report to Chief of Staff, GHQ/SCAP Records*, Civil Information and Education Section,1946
- Haiku Society of America<<http://www.hsa-haiku.org/>>2017年11月9日最終閲覧
- Japan Society, *Brief History*  
<[http://www.japansociety.org/page/about/brief\\_history](http://www.japansociety.org/page/about/brief_history)>2017年11月9日最終閲覧
- Online Computer Library Center (OCLC), *WorldCat*  
<<http://www.worldcat.org/>>2017年11月9日最終閲覧
- The Monuments Men Foundation  
<<http://www.monumentsmenfoundation.org/the-heroes/the-monuments-men>>2017年11月9日最終閲覧
- The New York Times Archives, *TimesMachine*,  
<<http://timesmachine.nytimes.com/browser>>2017年11月9日最終閲覧
- The Rockefeller Foundation, *Annual Report*,  
<<https://www.rockefellerfoundation.org/about-us/governance-reports/annual-reports/>>2017年11月9日最終閲覧

## 参照資料

表1 ヘンダーソンの経歴と業績(筆者作)

年	月	経歴 ・ 業績 ・ 出版	記事・書評
1889		ニューヨーク市で生まれる	
1910		コロンビア大学で学位取得	
不明		コロンビア大学で修士号取得(化学・工学専攻)	
1914		第一次世界大戦中、アメリカ陸軍で任務(～1918)	
1927		Metropolitan Museum of Art (NY) 極東部門でアシスタント学芸員となり、5本の論文を執筆(～1929)	
1930		日本(京都)で日本美術、日本語を学ぶ(～1934)	

1933		『日本美術史図録』の英訳完了	
		・ <i>The Bamboo Broom</i>	
1934	4		<i>The New York Times</i> (22日)
1935		コロンビア大学で「日本美術」「日本語」を教え始める	
		・ <i>An Illustrated History of Japanese Art</i>	
1936	3		『美術研究』51号
	10		<i>The New York Times</i> (4日)
1937		辞書編纂プロジェクトのため来日(6カ月滞京)	
		K.B.S.で辞書編纂について説明	
1939		・ <i>The Surviving Works of Sharaku</i>	
1942	3	角田柳作の身元引受人になる(24日)	
		ミネソタ陸軍情報学校の教科主任就任(学校設立5月)	
		・ <i>Handbook of Japanese Grammar</i>	
不明		対日心理作戦スタッフとなり、「落下傘ニュース」の制作に関わる	
不明		モニュメント・メン極東部門のメンバーに名を連ねる	
1945	9	GHQの初代CI&E課長に就任	<i>The New York Times</i> (18日)
	11	ホールが口頭で出した「教科書ローマ字使用・ローマ字化指令」を撤回	
	12	ブライスとともに「人間宣言」草案作成	
	12	CI&E顧問就任、その後帰国(1946)	
1948		Japan Society(JS)会長職に就く(~1952)	
1949		コロンビア大学で美術・言語・詩歌を教え始める	
1956		コロンビア大学退官	
1958		・ <i>An Introduction to Haiku</i>	
1959	3		<i>The New York Times</i> (8日)
1960		勲二等瑞宝章を授与される	
1965		・ <i>Haiku in English</i> (JSの依頼)	
1968		The Haiku Society of America(HSA)設立	
1974		他界	
1975		ヘンダーソンの書類等がNew York Public Libraryへ寄贈される	
1976		HSAに「ヘンダーソン賞」が創設される	